僕の日課

ヤマダヒフミ

集団狂気の中で生きるという事は大変なものである。・・・おそらく、僕が狂人なのだが。

世界には一つの価値観が支配していた。
それは「セックスの回数が人生の幸福度を決める」というごく単純なものだった。
セックス礼賛の書物と情報が大量に社会に進出した。どうしたセックスが出来るのか、というノウハウ本が常にテンミリオンくらいのセールスを記録した。
そしてセックス礼賛の中、まんまと多大な(数えきれない)回数のセックスをしたものは実に幸福そうに、平均二十五歳くらいの若さで皆死んだのだった。医者は言った。「死因はセックスのしすぎですね」

そして生き残った童貞野郎ども(セックスの回数が少ない連中はそう呼ばれたーーー決して童貞ではなかったーーー)は、二十五歳を過ぎると、突然別の価値観に目覚めた。
それは権力と金、というシンプルなものだった。
そしてそれは「どれだけ高いマンションの高層階に住めるのか？」というこれまたシンプルな定義が成された。権力と金=マンションの高層階だったのである。
マンションの建築ラッシュが始まり、世界は天を目指して、そして天を突き破って宇宙を目指し、無限の塔を作り始めた。
だが、その半分は欠陥工事の為、瓦解し、塔は崩壊し、マンションは崩れ落ち、みんなは瓦礫の下になって死んだ。
それは「高貴な死」と呼ばれ、尊重された。高層マンションの瓦礫の下で死ぬのは一種の名誉だった。
そしてある日、二千二十二階建ての二千二十階に住む、世界最高の男、バーナード・カラヤンスタイン氏がふと、新しい危険な(危険なというより死を伴う)遊びを思いついた。
彼は二千二十階から飛び降りたのである。
彼はその時の喜びを生前にICレコーダーに記録しておいた。そしてそれよりもっと大切な事は、彼はネットを使ってそれを全世界に中継したのである。・・・せいぜい一分足らずだったが。
全世界が彼の飛び込みに湧き、その落ちていく様にカラヤンスタイン氏が記録し、配信した映像はぶれて何が何やらわからなかったものの、全世界がその映像に驚嘆し、興奮した。
彼の死は当然、世界毒となり、もうみんなが大熱狂、ワクワクとしていた。
そして翌日から、マンションの最上階から飛び降りるという遊びが大流行した。みんな死んだ。

だが、それでも・・・しぶとい奴はいるものである。童貞で、しかも高いマンションにも住めず、おちおちと生き残った豚野郎共は新しい価値観を模索し始めた。
しかし彼らは、性と権力と金の他に、どんな価値観も見いだせなかった。(酒とタバコは何故かその頃にはもう廃絶していたのである。)
だが、彼らは最終的にこれぞ素晴らしい！という本物の快楽を、真実の価値を見出した。
それが「死」である。
これまで人類は無目的に死ぬ事を怖れていた。そしてマンション最上階から飛び降りた面々も、よく考えれば「死」に余計な意味を賦与していたのである。
だから彼らは無目的に死んだ。中には死を味わうために、一年かけてちょっとずつ毒を回らせて死んだ強者や、癌の摘出施術をするどころか、わざわざ他人の癌細胞を移植して死ぬ強者もいた。
こうしてみんな死んだ。
残ったのは僕一人である。
だから僕はこれを書いている。他に書く人はいないからーーー。

僕はサルやリスと毎晩遊んでから寝る事を日課としている。